

齋藤孝著「語彙力こそが教養である」角川新書、KADOKAWA 2015年12月10日刊を読む

## 語彙力こそが教養である

—はじめに—

1. 「言葉は身の文」ということわざがあります。話す言葉はその人の人格や品位までも表す、という意味の言葉です。
2. たしかに、テレビで芸能人やスポーツ選手のインタビューを見ているとき、なんとなく「頭がよさそうな受け答えだな」「意外と子どもっぽい」「普段のキャラクターと違って思慮深いんだな」と感じる場合がありますよね。
3. それではこのとき、あなたは、どういうところに着目して「この人は頭がいい」とか「子どもっぽい」「思慮深い」と判断しているのでしょうか。逆に言えば、どういうふうに話せばポジティブな印象を与えることができるのでしょうか。
4. 論理的な話し方？  
身振り手振りの使い方？  
話すスピード？
5. もちろん、そういった要素もあるでしょう。でも、相手から受ける印象を瞬時に決定づける要素が、ひとつだけあるとしたら。
6. 私の答えははっきりしています。それこそが、この本のメインテーマである「語彙」なのです。
7. 語彙によって相手に与える印象が変わるのは、芸能人やスポーツ選手だけではありません。「言葉は身の文」なのは、あなたも同じ。使う言葉のレパートリーが少なかったり、平易な言葉でしかものを語れなかったりすると、「物足りない人」という印象を持たれます。反対に、あなたの語彙力が豊かであれば、仕事でもプライベートでも「一目置かれる存在」になれるのです。いい年になって適切な言葉を適切な場で使える人と、使えない人。どちらの能力が高そうか、言うまでもありませんからね。
8. では、どうすればいいか。簡単です。語彙力を鍛えればいいのです。
9. 「鍛える」というと、ストイックに勉強をするイメージを思い浮かべるかもしれませんが、しかし、本書で紹介している語彙を豊かにするためのトレーニングは、習慣にしていればいずれも楽し

く、知的好奇心を刺激される作業です。

10. 好きな作家のエッセイや海外ミステリーを読む。夏目漱石<sup>なつめそうせき</sup>を音読する。ウディ・アレンの映画をまとめて観る。テレビ漬けになる、といった方法さえもあるのですから。
11. 詳しくは本文に譲りますが、辞書的な暗記は一切不要。決して受験勉強めいたり、苦痛や根性を伴ったりするものではありません。私自身が実践してきた方法ばかりですから、それはお約束します。
12. 知的好奇心を刺激されるような楽しいトレーニングをしていたら、いつのまにか語彙力が鍛えられる。
13. 自分でも満足のいく発言ができ、部下からも上司からも、取引先からも一目置かれるようになる。
14. おいしい話すぎてあやしい？でも、本当です。ぜひ、今日から本書を読み、読み終わった瞬間、騙<sup>だま</sup>されたと思って「語彙力トレーニング」を生活に取り入れてみてください。
15. より多くの語彙を身につけることは、手持ちの絵の具が増えるようなものです。8色の絵の具で描かれた絵画と、200色の絵の具で描かれた絵画。どちらの絵が色彩豊かで美しいか？いわずもがな、200色のほうでしょう。語彙力を身につけることは、いままで8色でしか表現できなかった世界が、200色で表現できるようになるということなのです。
16. 「すごい」「やばい」「なるほど」「たしかに」ばかり使う人は、8色の絵の具しか持っていない人。
17. 一方で、200色の絵の具を使える人は、あまねく表現を駆使して相手を動かします。部下にかける言葉も、自己アピールの言葉も、ビジネスでの商談も、プライベートな雑談も、「200色」の彩りをもって表現できるようになる。当然、それに伴って、あなたが受ける評価も大きく変わっていくでしょう。
18. そして、もうひとつ。私が本書をとおして伝えたいのは、「語彙が豊富だと周りから一目置かれる」ということばかりではありません。
19. いちばん伝えたいのは、「語彙が豊かになれば、見える世界が変わる」ということ。人生そのものが楽しくなるということです。
20. 思考は、頭のなかで言葉を駆使して行われます。つまり、何かについてじっくり考えて意見を持つためには、先にたくさんの言葉をインプットすることが必要不可欠です。英語が苦手な人は、英語で深く思考することはできないでしょう。それと同じように、乏しい語彙力では、それをとおした狭い世界しか見ることができません。

21. 本書のタイトルは「語彙力こそが教養である」。語彙のインプットとアウトプットを繰り返すなかで教養あふれる大人になることが、本書の目的です。
22. 本書を読み、たくさんの語彙をインプットすることで、たくさんの「知らなかった！」と出会うことでしょう。そのなかで、いままで8色で認識していた世界が、200色にも、500色にもなって目の前に広がる感動を味わえるはずです。
23. さて、本書は次のような流れで構成されています。
- (1) 第1章では、そもそも語彙とは何なのか、語彙力の有無をどのように判断すればいいのか、なぜ現代日本において語彙力が低下しているのか、など基本のお話を。さらに、いままで格納されていた「語彙のアンテナ」を高く保つ練習もご紹介します。
  - (2) 第2章では、いよいよ語彙力トレーニング本番。まずは、王道の読書によるインプット法をお伝えしていきます。古典・名著からミステリー、エッセイまで、それぞれおすすめの本をいくつか挙げているので、気になったものからチェックしてみてください。
  - (3) 第3章は、本以外のあらゆるインプット法について。テレビ、映画、音楽、インターネットなど、「これも語彙のインプットになるのか」と驚かれるようなトレーニングもあるかもしれません。いずれも、今日から生活に取り入れられるものばかりです。
  - (4) 第4章では、インプットした語彙をアウトプットによって定着させ、「実際に使える言葉」に変えていくトレーニングです。さらに、日本人なら一度はアウトプットしてみたい古典も多数紹介。いざ人と話すときに気の利いた言い回しがぱっと出てくるかどうかは、このトレーニングにかかっています。
  - (5) 第5章は、さらにワンランク上の「深い語彙力」を身につけるためのトレーニングをご紹介します。また、変化する言葉との付き合い方や、語彙力低下の一途を辿る日本が今後どうしていけばいいかなど、言葉と向き合うときに考えたいことをお話ししたいと思います。

#### <コメント>

「語彙力こそ教養である」。まさにその通りだと思う。では、どのようにして語彙力を増やし、教養を身に着ければよいのか。齋藤孝先生の本書を熟読玩味し、少しでも実行に移して頂きたい。

— 2016年8月23日(火) 林 明夫記 —